
流星のロックマン絆を守る者

チョコボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン絆を守る者

【Nコード】

N0175I

【作者名】

チヨコボール

【あらすじ】

メテオGの事件から二ヶ月そんなある日スバル達が通っているコダマ小学校に響ミソラが転校してくる。そして、スバルはミソラと付き合うことになる。バトルあり恋愛あり

転校生（前書き）

元、一つの希望復活しました！

転校生

僕の名前は、星河スバル
今僕は、彼女であるミソラちゃんが、バトルの特訓をしたいらしく、
戦っている。

何故このようになっていたかは、遡ること四日前の月曜日

「ふわあああ」

僕は今学校にいる。

余りに眠くてつい欠伸をしてしまった。

「星河君、随分大きな欠伸ね」

僕のまえには、委員長達がいる。

一人ずつ名前を説明すると、1番前にいるのが、委員長こと白金ルナ

僕が、ウィザードである、ウォーロックと電波変換してなれる、ロ
ックマンに惚れている。

右側には、最小院キザマロ

簡単に彼を説明すると、背が低くて、眼鏡を掛けた頭いい少年だ

左側には、牛島ゴンタ

体型は、デブ

服には、フォークとナイフの絵がプリントされている。

「やあ、委員長」

僕は平然と委員長に会話した。
そして、委員長と色々会話をしていると……

「皆席に着けよ！」

教室の扉を開けて育田先生が、今日に入ってきた。

「皆前から言っていたが今日転校生が来ている。」

（一体誰なんだろう）

（男の子かな？女の子かな？）

皆は、なんかザワザワと会話をしていた。

「皆静かにしろよ」

育田先生が言うと皆一気に静まり帰った。

「それじゃあ、入ってきて」

ガラガラガラガラ

育田先生が、扉に向かって言うと、扉が開いた。

僕は疲れているのか、黒板に自分の名前を書いている、少女が僕の初めてのブラザーである、ミソラちゃんに見えて仕方ない。

「ベイサイドシティから転校してきた響ミソラです」

どうやら、見間違えではなく、正真正銘ミソラちゃんだった。

皆は、なんだか口をポカーンと開いている。

「みんな、転校生に拍手」
育田先生が、そういうと

パチパチパチパチ

「ミソラちゃん、これから宜しくね」

「ミソラちゃん仲良くしよ」
等と皆が言っている

ミソラちゃんは、なんだか凄く嬉しそうにしている。

「響、席は空いてるところに座っていいぞ」

育田先生が、そう言うときミソラちゃんは、頭を一回コクンと、下に下ろした。

そして、ミソラちゃんはキョロキョロしている。

そして、僕と目が合ってニッコリ笑っている。

「先生、私スバル君の隣がいいです」

ミソラちゃんがそういうと……

「……なにい」

皆が凄く声を上げて僕の方を睨んでくる。

ぼ、僕終わったな

「スバル君これから宜しくね」

僕が、そんなことを思っていると、隣の席に座ったミソラちゃんが僕にしか見えない用にウィンクをした。

その時僕は、胸がドキドキして、さらに背中から凄い殺気を感じたのは、言うまでもない。

ミソラの家（前書き）

チョコボール復活です

しばらく、更新出来なくてすみません

ミソラの家

「ミソラちゃんちょっといいかしら？」

いつもお馴染み委員長軍団？がミソラの席の前にやってきた

「どうしたのルナちゃん？」

「ミソラちゃんの家って、ベイサイドシティにあるのに、なんでこんなに遠いコダマ小学校に転校してきたのかしら？」

委員長は、ミソラに聞きたかったことを、少し早口口調で述べた。

「なあ〜んだ、そんなことかあ」

ミソラは、なんでもないので、楽に言った。

「そんなことって……」

「だって、私お引越したんだもん」

「……なるほど」「……」

ミソラの言った言葉でスバル、キザマロ、ゴンタは納得した
しかし……

「ミソラちゃん、それじゃあ、放課後家に行ってもいいかしら？」

ルナは、ヤバイ予感がしたから、そう言った。

「いいよ」

ミソラは、笑顔で言った。

そして放課後

委員長軍団、ミソラ、スバルは、ミソラの家に行く為に帰り道を歩いていた。

そして、公園の近くの交差点を渡ってスバルがまさかと思った

「ここが、私の家だよ」

ミソラは、二階建ての青い屋根をした家に指を指した。

それは、スバルのよく知っている家だった

なんたつてそこは？

「えっ！？、僕ん家！？」

そう、そこはスバルの家だった

「これから、星河家に住むことになりました。よろしく」

ミソラはスバルに頭を下げた

ミレニアムのビッグリボウ(前書き)

本日の話目

ミソラのビックリ告白

今スバル達は星河家のまえにいた
そして…………

「ミソラちゃん、今なんて言ったかしら？」

「今日から、スバル君家に住むことになったって言ったんだよ」
ミソラは、ルナからの質問になんく答えた。
ゴンタ、キザマロ、スバルはと言つと…………

「委員長怒ってます」

「スバル一体どういうことだよ」

「僕に言われてもわかんないよ」

上からキザマロ、ゴンタ、スバルの順に述べた。

『スバルにその内火の粉がいくぞ』

『ポロロン、貴方にしては上手い例えね』

『ブロロ〜火の粉ぐらいなら、俺が出してやるつか？』
上からロツク、ハープ、オックスの順に述べた

「星河君ちよつといいかしら？」

「は、はいいい」

スバルは、とても分かりやすくビビっていた。

「なんで、ミソラちゃんが貴方の家に住むことになってるのかしら」
「えつと、それは…………」
スバルが、状況分析をしていると

「前の小学校には、余り友達と呼べる子がいなくてコダマ小学校に

転校しようと思ったけど、どこに住むか変装して、公園で考えていたら、スバル君のお母さんに、なんなく正体がバレて、色々話したら住まわせてくれるって」

ミソラは、少し長めにわかりやすく説明した。

「別に、私の家でもいいじゃない」

ルナは中々食い下がらなかった

「スバル君は、私の初めてのブラザーで、シンガーソングライター
の私としてじゃなく、一人の人間として声をかけてくれた初めての
友達であり、好きな人でもあるからスバル君の家がいいの」

ミソラも、負けじと言った

だが、皆さんお分かりだろうか？

今ミソラの言ったセリフにビックリ発言が！

「ミソラちゃん、今のは告白なの？」

「えっ!?!?.....あっ／＼／」

ミソラは、今気づいて顔が赤くなった

絆の崩壊（前書き）

スバルのキャラがおかしい

絆の崩壊

「ミソラちゃん一体どう言うことなの？」

今ミソラは、前回の話で言った告白のことで、尋問を受けていた

「え、えっと………」

「ミソラちゃん」

「ミソラちゃん」

ミソラは、必死に言い訳を考えているとゴンタとキザマロが迫ってきていた。

「え、えっと………」

「」「ミソラちゃん」「」

今度は3人そろって言った。

そして、ミソラは……

「うわ〜ん」

ミソラは、皆に（スバルを除いて）プレッシャー？をかけられて泣いてしまった。

「委員長も、ゴンタも、キザマロも酷いじゃないか！」

ここで、とうとうスバルがキレた

「ミソラちゃん大丈夫だからね」

「グスツ……スバル君」

スバルがミソラを落ち着かせていると……

「星河君はミソラちゃんに甘過ぎなのよ……」
ルナが、逆ギレした

「じゃあなに？委員長はこのままミソラちゃんを泣かせているとでも言うの！？」

スバルは、段々頭に血がのぼってきていた

「別にそうとは言っていないでしょ…ただ…」

「ただ、なんだよ」

スバルがついに噴火した

「スバルお前言い過ぎだぞ！」

ゴンタが食って掛かった

「ゴンタ、君も委員長の味方なんだね」

スバルは、キレて頭がおかしくなったのか電波変換をした。

「ゴンタも早く電波変換しなよ」

「す、スバル……」

「どうやら、僕たちは敵同士みたいだ」

スバルの目には既に光が無かった

「チツ！しゃあねえ電波変換」

ゴンタも電波変換をして、オックス・ファイアになった。

『スバルどうした？急に電波変換なんてして』

「ロツク、オックスと闘えるよ」

スバルは、笑ってロツクに言った

「スバル君？」

ミソラは、スバルのことを心配していた

「ミソラちゃん大丈夫だよ。僕は君の味方だし、ミソラちゃんのことが好きだから」

スバルは、ミソラと話す時だけ、目に光が戻ったが、ミソラと話し終わるとまた光が失った

「オックス、スバルの奴を一発殴って目を覚まさせるぞ」

『プロロロ、わかったぜゴンタ』

「ウエーバトル・ライド・オン！」

V S オックスファイア

今スバル（ロックマン）とゴンタ（オックス・ファイア）は、勝負を始めていた。

「アングーパーンチ」

オックスファイアは、ロックマンの前に移動して手をふりおろした。

「バトルカード インビシブル」

ロックマンの体は透けてアングーパーンチはあたらなかった

「今度は、こつちからいかせてもらおう、バトルカード デイバイド
ラインアンドアイスステージ」

ロックマンは、自分の前に穴を作り、パネルを氷に変えた

「チッ！これじゃあ、攻撃出来ねえ」

「バトルカード、ワイドウェーブX & amp; ブレイクサーベルX」

ロックマンは、氷パネルの上にいるオックスファイアに、ワイドウェーブを撃った

皆さんロックマンのやることはもう、お分かりでしょう。

「ゲッ！」

オックスファイアは、凍ってしまった

「てやあ！」

ロックマンは、凍っているオックスファイアにブレイクサーベルで切った

凍っている相手にブレイク系の攻撃をすると威力が二倍になる

「グツ！ま、まだだ…」

オックスファイアは、膝を地面につけながら起き上がるとしている

「やっぱり、ゴンタはタフだね。ノイズチェンジ キャンサー」

ロッキマンは、ノイズの力を使ってキャンサーノイズとなった。

「NFB ダイナミックウェーブ」

ロッキマンは、回転をしながら足で地面をけると、大きな津波が3つでて、オックスファイアをのみこんだ。

「うわあああ！」

さすがに、力尽きたのかオックスファイアは電波変換が解けてゴンタに戻っていた。

そして、スバルも電波変換を解いた

そして、スバルの体に異変が起きていた。

「なに、スバル君からなんか黒いオーラみたいなのが出ている」

ミソラがいち早く気付き皆に言った。

「ミソラちゃん」

スバルはそういうと、ミソラを抱き締めた

そして、ミソラにもその黒いオーラが発生していた

「電波変換！」

そして、ミソラとスバルは電波変換をして、何処かへ行ってしまった。

復習開始！（前書き）

余りうまくかけなかった

復習開始！

スバルとミソラは、電波変換をしてあるところに来ていた

「ようこそ、わが基地オービタルベースへ」

今喋ったのは皆が死んだと思っていたキングである

「そして、私の新たなコマよ」

「ハッ！キング様前は申し訳ありませんでした」

どうやら、スバルとミソラをおかしくしたのは、キングだったようだ
そして、スバルが言う前とは、クリムゾンドラゴンのことである。

「気にするなロックマン」

「キング様こうして、顔を会わせるのは二回目ですね」

次は、ミソラが喋ったちなみに、キングとミソラが初めて会ったのは、ジョーカーと戦った時である。

「そうだな、ハープノート」

「キング様もし、よろしければ我々に称号をお与えください」

「そうだな、ではロックマンには、エースの称号を、ハープノートにはクイーンの称号を与える」

ちなみに、以前のエースの称号を持っていたのは、暁シドウ
クイーンの称号を持っていたのは、クインティアである。

「ハッ！ありがとうございます」

「それでは、新たなメンバーが、出来ただ組織名も変えよう、メ
テオにしよう」

「ハッ！我らキング様についていきます」

ロックマンは、膝を床につけそうだった。

「そして、ロックマンとハーブノートはいつも2人で行動をしる、チームプレーとかも出来るだろ」

キングは少し考えてロックマンとハーブノートにそう伝えた

「そして、お前たちに任務を言い渡す、WAXA日本支部を潰してこい」

キングはロックマンとハーブノートにそう命令をくだした。

「ハッ！」

ロックマンとハーブノートはそう言うとWAXA日本支部へと向かった。

「まさか、ロックマンを仲間に入れれるとはな、さすがだぞ………
ジョーカー」

「有り難き言葉、どうやらシリウスとの戦いで、ノイズに対抗出来るプログラムが弱っていたようです」

ジョーカーは、キングの前に素早く現れた。

「そして、私が開発した、エースノイズを星河スバルのハンターに組み込んだんだな」

「はい！」

「ハッハッハッ！今度こそ、WAXAの連中に復習してやる！」
キングは大声を出して笑っていた。

奇襲（前書き）

たぶん、一番長いと思います。

最初に最長いのを書いたんですけど、間違えて消しちゃいました

奇襲

ロックマンとハーブノートがWAXAに向かっている頃WAXAでは……

バタン！

ルナ達が荒々しく、ドアを開けた

「暁さん、暁さん、星河君とミソラちゃんか！」

「わかつているよ、ルナ、スバルとミソラがおかしくなっただけ何処かへ行ってしまったんだろ」

ルナはびっくりした。

なぜ、シドウがそのことを知っているのかそして、なぜうまい棒を食べていないのか

「暁さん、なんでわかるんですか？」

キザマロは不審に思い、シドウに質問をした

「そういえば、お前らには行ってなかったな、スバルのハンターV Gに発信器をつけたのさ」

シドウは、スバルのつけた小型発信器を持ちながら言った。

「でも、いつ発信器なんてつけたんですか？」

「お前達と初めてあった、コダマ小学校だよ」

ルナの質問にシドウは軽々と答えた。

「ちなみに、いつスバル達が来ていいように、彼を呼んである」

「皆久しぶり」

部屋の奥から出てきたのは双葉ツカサであった。

「ツカサ君久しぶり」

「委員長本当に久しぶりだね」

等と、色々会話をしていると……

「シドウもうスピードでこちらに接近してくるものを確認しました」
「距離は？」

「80いや60もの凄いスピードです」

WAXA外

「ロックマンやつと着いたね」

「うん、ウィルスが邪魔で少し時間が掛かっちゃったね」
そこにいたのは、ロックマンと、ハープノートであった

「ロックマンはやく壊しちゃお」

「そうはさせないよ」

ロックマン達の前に現れたのは、アシッドエース、ジェミニスパーク、ジャックコーヴァス、クイーンヴァルゴであった

「やあ、暁さんじゃないか」

ロックマンは、ゆっくりアシッドエースに近付いていた

「それ以上近付いたら攻撃する」

ジェミニスパークWとBは、ロケットナックルを構えて言った。

「少し、数に部があるなあ、ジョーカー来てくれ」

レベルの違い（前書き）

はい！

最初はロックマン達のバトルです

なぜ、最初がロックマンなのかって？

それは、まだ秘密

そして、新技が

レベルの違い

さて、ロックマン達のバトルを見てみよう

「ロケットナックル」

「ペインヘルフレーム」

ジャックコーヴァスはロケットナックルに火を着けてさらにスピードを上げた

「バトルカード、コガラシ」

ロックマンは自分の前にコガラシを発生させて、ロケットナックルを弾いた

「流石スバル君だ！ジャック君新技いくよ！」

「もう使うのか、しゃあない」

ツカサはジャックにそういうと、ジャックは了承した

「新技？」

ロックマンは宙に浮きながら3人の出方をまった

「ヒカルいくよ」

「いつでもいいぜ、ツカサ！」

ジェミニスパークは、ジェミニサンダーの構えに入った

「ジェミニキャノン」

ジェミニスパークは、そう言うと、ジェミニサンダーを球体にしたような物を連続で撃った

「エアロスピン」
ジャックコーヴァスは、エアロダイブにスピンを加え体に黒い炎を纏って突っ込んできた。

「ツカサ君もジャックも、少しは成長したみたいだね。でも……僕に勝つのはまだ早い」

ロックマンは、余裕そうにニヤリと笑った

「よく、この状態で笑ってられるね」

「あたりまえだよ、エレメンタルサイクロン」

ロックマンはその場で凄い回転を起こして竜巻をつくりだして、ジエミニキャノンを全て打ち消した

「まだ、俺の攻撃が残っているぜ」

ジャックは、さらにスピードを上げて突撃していった

「はあ〜」

スバルは、呆れたように、ため息を吐くと、地面を蹴った

「ダイナミックウエーブ」

ジャックは、もうスピードで突撃しようとしていたので、ダイナミックウエーブを避けれずにもろに喰らった

「君達には、ガツカリだよ」

スバルは、宙に浮きあがり、手にブラックホールを作りだした

「ツカサ！逃げるぞ！」

「う、うん！」

ジャックとツカサとヒカルは必死に逃げだした

「このブラックエースのスピードから逃げれると思っているの？」
ロックマンは、ジェミニスパークとジャックコーヴァスの目の前に
あらわれた

「もう、ダメだ……」

「くらえ……」

ジャック達が諦めてロックマンがブラックホールを投げようとした
時、もうスピードで紫色の光がロックマンに接近した

「ブライブレイク！」

そう、現れたのは孤高の戦士ブライだった

レベルの違い（後書き）

ブライを出したくて、出しちゃいました

VSフライ(前書き)

フライも、新技を使います

V S ブライ

前回のおさらい

ジェミニスパークと、ジャックコーヴァスがやられそうになった時にブライ登場

おさらい終了

「やあ、ブライじゃないか」

「星河スバル、ノイズの力に負けるとは情けない」

ブライは、ブラックエースになっているロックマンを睨み付けた。

「ブライ、君だってノイズの力を使えるんだろ？なら、知っているはずさ、この力の凄まじさを！」

ロックマンは、自分の手を見ながらブライに語った。

「俺は、ちゃんとコントロール出来ている、時間の無駄だ、さつさと始めるぞ」

「ブライ、本当に君はタンキだな、仕方ない」

ロックマンは、呆れたような目をして言った。

「ウエーブバトル・ライド・オン」

「ラプラスブレード、ブライソード！」

ブライは、ウイザードであるラプラスを剣にかえ、さらにブライソードを出して、二刀流になった。

「剣対決か、面白い」

ロックマンも、ノイズを蓄積させて、ブラックエンドギャラクシーをやる時に使う剣を出した

カン！カン！カン！

「グッ」

ブライが段々ロックマンに押されてきていた

「ブライ、さっきまでの自信はどこに消えたのかな？」

ロックマンは、ブライを馬鹿にするように言った

「うるさい！ダブルブライブレイク」

ブライは、ラプラスブレードとブライソードを使いブライブレイクをした。

「バトルカード、オーラ」

だが、ロックマンは咄嗟に判断して、オーラは消されたがダブルブライブレイクを防いだ

「ロックバスター！」

ロックマンはブライにバスターを撃った

「無駄だ！」

カン！カン！カン！

ムーリジェクションにより、全て防がれた

「ブライ、そうくると思ったよ」

「なに!？」

ロックマンは、不適に笑いながらブライに言った

「ムーリジエクシオンは、直ぐにまた出すことは出来ない」

「グツ!その通りだ」

ブライは、下唇を噛みながらロックマンに言った

「これで終わりだ!ブラックエンドギャラクシー!」

ロックマンは、ブライにブラックホールを投げつけてそれを、切り裂いた

「ぐわあああ!」

ブライは電波変換がとけて、ソロの姿になっていた

「嘘だろ!あのブライが完敗するなんて……」

ロックマンとブライのバトルの一部始終を見ていた、ジェミニスパークとジャックコーヴァスは、びっくり!していた

「さてと、ミソラちゃん達のバトルでも、見物させてもらっかな」
ロックマンは、ブラックエースの姿を解除して、その場に座って言った

V Sブライ (後書き)

ダブルブライブレイク

攻撃範囲 全マス

威力 ブライブレイクの倍

ダブルブライブレイクが成功すると、毒状態になる

作戦成功！（前書き）

本日2話目

正直疲れた&mp;下手くそだあ

作戦成功！

「向こうは終わったようね」

ハープノートは、地面に座っているロックマンを見ながら言った

「それじゃあ、こちらも始めましょうかミソラちゃん」

クイーンヴァルゴは、もっている杖を構えた

「パルスソング！」

ハープノートは、ハート型の音波をだして、飛ばした

「ハイドロドラゴン」

クイーンヴァルゴは、杖を地面につけると、水で構築されたドラゴンが出てパルスソングをかきつけて、ハープノートに接近していた

「ショットクウエーブ！」

ハープノートは、左右にスピーカーをだして、音符を沢山だした

「バトルカード、アイスステージ」

クイーンヴァルゴは、アイスステージを使いハープノートのエリアを氷に変えた

「バトルカード、パラライズステージ」

ハープノートも、負けじとクイーンヴァルゴのエリアをパラライズに変えた

「バトルカード、ネバーレイン」

クイーンヴァルゴは、杖を空に掲げて、ネバーレインを降らせた

「バトルカード、オーラ」

ハープノートは、咄嗟にヤバいと判断し、オーラで全ての雨をしの

いだ

「甘いわよミソラちゃん」

ハーブノートが気付くとクイーンヴァルゴが目の前にいた

「しまった！」

ハーブノートはこの時ヤバいと本気で思った

「バトルカード、ジェットアタック！」

ハーブノートが危ないと思った瞬間凄いスピードで、なにかが、ハーブノートの前に出た

「ライトオブセイント！」

クイーンヴァルゴは、グルグル回転をしながら攻撃をした

「ガハッ！」

だが、ハーブノートには一切ダメージは無かった、ハーブノートが恐る恐る目を開けるとそこには……

「スバル君！」

そこには、体から煙が出ておりそこらが黒く焦げているロックマンがいた

「ミソラちゃん、怪我はない？」

ロックマンは、足がふらふらしながら、ハーブノートの方を向いた

「私なら大丈夫！でもスバル君が！」

「僕も大丈夫だよ、リカバリー300」

ロックマンは、リカバリーを使いさつき受けた攻撃をもろともしな

いような、表情でいた

「ヨイリー博士まだですか!？」

クインヴァルゴは、ロツクマンとハープノートが会話をしているなら、ヨイリーに連絡をとっていた

「待たせたわね、皆ノイズキャンセラー発射」

皆は覚えているだろうか？

以前、ウォーロツクコピーがWAXAに襲撃してきた時に使った、WAXAの秘密兵器である

「うわああああ」

「きやああああ」

ロツクマンと、ハープノートは頭を押さえながら苦しそうに唸っていた

そして、2人の体からクリムゾンが出てきていた

「……………」

2人は、気を失ったのか、電波変換がとけて、横になっていた

「たく、世話をかけさせやがるぜ」

ジャックは、やれやれと言って電波変換をといいた

「でも、よかったよ2人が戻って」

「たく、本当にどうしようもないやつだな」

ジェミニスパークも、電波変換をといいた

「お前ら、まだ1人敵が残っているのを忘れてないか？」
アシッドエースは、剣を構えてグレイブジョーカーに突っ込んでいた

「ロックマンと、ハーブノートがまあいい」
ジョーカーは、そう言い残すと、アシッドエースの剣を払いのけ消えてしまった

作戦成功！（後書き）

もう、2人なおっちゃんいました

カップル誕生

ロックマン達との戦いから3時間後

「うつ、うつん」

ミソラは、病院のベッドの上にいる

「やあ、ミソラ目が覚めたかい？」

「暁さん！」

ミソラは、声のする方をみたら、椅子に座っているシドウがいた

「私は一体……」

「体にノイズを埋め込まれて操られていたんだ」

シドウは、ミソラにもわかるように超簡単に説明した。

「はっ！じゃあ、スバル君は？」

ミソラは、スバルに抱きつかれた時のことを思い出して言った。

「……ついてこい」

シドウは、暗い顔をして椅子から立ち上がった

「はいっ！」

それにつられてミソラも、ベッドから降りた

ある病室の前

そこには、星河スバルの名前があった

「ミソラ、スバルを見ても我を見失うんじゃないぞ」
シドウは、ミソラにそう告げた

「はっ！スバル君！！」

ミソラは、シドウの言った言葉の文がわかったのか、スバルの病室の中に入っていった

「やあ、ミソラちゃん」

病室の中にはベッドに普通に座りながらリンゴを食べているスバルがいた

「あれれ？」

ミソラは、さっきシドウが言った言葉からしてヤバいことになっていると、予想していたのに見事に予想が外れて驚いていた

「ハハハ！すまんミソラ」

シドウは、笑いながらスバルの病室に入ってきた

その時……

「他の患者様に迷惑なので静かにしていただけますか？」

シドウは、看護婦に注意をされた

「あっ！すみません」

「くすくす」

ミソラは、その様子を見て必死に笑いを堪えていた

「ミソラをからかった罰があたったな」

「????」

スバルは、なにがなんだかわからないのか、首を傾げていた

「スバル君、どこもいたくない？」

「大丈夫だよ」

ミソラは、心配そうにスバルの顔を見ながら言った
だが、本当に至って元気そうだ

「スバルは、丈夫さだけが取り柄だもんな」

久しぶりの登場のウォーロックがいった

「あんたは、黙ってなさい」

そこに、ハーブが出てきてウォーロックの首を掴んでどこかへ行ってしまった

「スバルも元気そうだし、そろそろ俺は帰るな」

シドウは、そう告げると、胸ポケットから、うまい棒を取り出し食べながら病室を出ていった

その時また注意の声が聞こえたが気のせいであろう

「でも、スバル君が本当に無事でよかった」

ミソラは、スバルに抱きつきながら言った

「ミソラちゃんも、元気そうだね、ってか離れてくれないかな？」

スバルは、少し頬が紅くなりながら言った

「そうだ、スバル君あの時私のこと好きって言ってくれたよね？」
ミソラが言うあの時とは、VSオックスファイアの時のことである

「う、うん」

スバルは、恥ずかしそうに人差し指で頬をかいていた

「じゃあ、スバル君私と付き合ってください！」

「えっ!?!」

「ダメかな？」

ミソラは、少し涙目になりながら、スバルに言った

「僕なんかでいいの？」

スバルは、自分に指を指しながらミソラに聞いた

「スバル君じゃなきゃ、嫌なの」

ミソラは、凄く子供っぽい無邪気な笑顔をしながら言った

「わかった、よろしくねミソラちゃん」

スバルは、ニッコリ笑ってミソラにそう告げた

「うん！」

ミソラは、本当に嬉しそうに返事をしてスバルにキスをした

「星河さん、体調はどうですか？」

その時、スバルの病室に看護婦が入ってきた

「し、失礼しました」
看護婦は、スバルとミソラがキスをしているのを見ると、慌てて病室を出た

「見られちゃったね」

「だね」

2人は苦笑いをした

オービタルベース

「ロックマンとハーブノートを失ったかあ」

キングはジョーカーを見ながらそう言った

「はっ！申し訳ありません」

「まあ、よい次はお前達に任せるぞ」

キングはそういうと、体が赤色で頭が尖って剣を持っている者と頭が丸くて、スバルが電波変換をしたロックマンに似た者に指を指しながら言った

「はっ！おまかせあれ」

2体は、そう言う姿をけした

「これで、ロックマンもおしまいだ、ハッハッハッハッ」

そこには、キングだけの笑い声が響き渡っていた

カップル誕生（後書き）

なぜが、ウォーロック達より看護婦の方が多少出番が多い（笑）

そして、最後に出た2体皆さんお分かりですよ

待ち合わせ

スバル達が退院して2日後

今日は、スバルとミソラのデートである

「ミソラちゃん遅いなあ」

スバルは、待ち合わせ場所であるウェーブライナー乗り場の前でミソラを待っていた

『まあ、仕方ないんじゃないかねえか、ミソラも仕事あるんだからよ』
久しぶりにちゃんと喋ったウォーロック

「だよね」

『まあ、のんびり待とうぜ』
ウォーロックは、ハンターV.Gに戻って昼寝をしてしまった。

それから、10分後

「ミソラちゃん遅いなあ」

スバルは、川に小石を投げていた

「スバル君お待たせ」

「ん？……うわああ！」

スバルが後ろを向いたら丁度真後ろにハーブノートがいてスバルは、びっくり！した。

「そんなに驚かなくても」

ミソラは、クスクス笑いながら言った

「ごめん」

「じゃあ、今日はスバル君になにか奢ってもらおう」

ミソラは、ニッシッシッてきな感じに笑いながらスバルに言った

「そ、そんなぁ……まぁ、いいか」

スバルは、ハンターV Gを確認して、HPメモリーを買ったために貯めていた、30000ゼニーあることを確認して了承した

「冗談で言ったのにやったあ」

ミソラは、本当に嬉しそうにピョンピョン跳ねていた

「ミソラちゃん、ウエーブライナー来たよ」

「あっ！待ってよ」

ミソラは、電波変換を解除して、サングラスをはめていつも着ているパーカーを脱いでかわりに、コートを着て変装した

「凄いはやわざ」

スバルが、そのミソラの着替える速さにびっくり！していた

ウェーブライナー（前書き）

すみません

ロックマンエグゼOSSでチップをコンプするために、更新のことをすっかり忘れてました

と、言っても全部そろってないけど
あと、八枚

あっ！

ちなみに、ロックマンのレベルは多分MAX이었습니다

どうでもいいか（笑）

ウェーブライナー

今はウェーブライナーの中

(ねえ、あの子ってひよつとした、星河スバル君?)

スバル達の向かい側に座っている、女子高生の一人がそういった

「しまったあ、父さんがロックマンの正体をばらしたことをすっかり忘れてた」

そう、メテオGを破壊した時に、スバルを地球に帰すために、正体をばらしたのだ

(だよね、だよね、スバル君だよあれ、じゃあ隣の女の子は彼女?)

「くくくくくくく」

その女子高生の言葉を聞いて二人とも、顔が赤くなった。

「スバル、顔赤いが熱でもあるんじゃないか?」

ウォーロックは、ウィザードONをして言った

『馬鹿!あなたなにやってるのよ』

そしたら、ハープもウィザードONをして、ウォーロックの首を掴んでハンターVGに戻った

(いまのが、スバル君のウィザードかあ、でもさっきの琴みたいなウィザードどこかでみたことあるな)

女子高生は、3人いて、その内の太っているかたがそう言った

「（ウォーロックの馬鹿！）」

「（ロック君の馬鹿）」

2人は心の中でウォーロックを馬鹿呼ばわりしていた

そんなこんなで、会話をしていると、ロツポンドーヒルズに到着した

ウェーブライナー（後書き）

かなり、短い

そして、ロックとハープの出番が少ない

ミソラちゃんのこと……（前書き）

すみません

昨日のバイトの面接で頭がいっぱいで更新遅れちゃいました

ちなみに、すき家の面接です（笑）

ミソラちゃんの胃って……

今、スバルとミソラはデートをするためにロッポンドーヒルズにきていた

「スバル君はやく行こうよ！」

ミソラは、スバルの手を引っ張り子供の用にテンションが上がっていた

「ちょっと、待ってよミソラちゃん」

そういって、スバルとミソラはエレベーターにのり、上まで行った

『ミソラ、私はこのガッツと一緒にどこかに行ってくるわね』
ハープは、ハンターV.Gから、ウォーロックの首をしめながら出てきて言った

『は、ハープ、ギブ離してくれ』

ウォーロックは、目が回って死にそうになっていた

「」（ウォーロックかわいそうに）」

スバルとミソラは、見事に心の中で思っていることが一致した

そして、ハープとウォーロックはどこかへ行ってしまった

「スバル君、あのパフェのお店またあるよ」

ミソラは、目を輝かせながら、あるパフェ屋を見ていた。

その、パフェ屋とは流星のロックマン2で登場したお店だ

「あ、懐かしいね、久しぶりに食べて行くのか」

「えっ！いいの」

「うん」

スバルがそういうと、さっき以上に目を輝かせ、光の速さでパフェ屋に行った

「以前は、富士山のを食べたよね？」

スバルがそういった

確かにそうだ

「そうだよ 今回はこのエベレストDXパフェにしよう」

ミソラは、キラキラと目が眩しいほどに輝いていた

「うん、そうしようか（まあ、二人で一緒に食べればなんとかなるかな）」

だが、スバルの考えは甘かった

「この、エベレストDXパフェ2つ下さい」

「（あれ？聞き間違えかな？今2つって）」

スバルは、聞き間違えでありますようにと祈りに祈った、だが………

「はい、こちらになります」

そういつて、店員は2つパフェを渡した

その、パフェは富士山のやつより、2、5倍ぐらい大きかった

「お会計は2000円になります」
店員にそう言われ、スバルはハンターV Gをレジにかざしてお金を払った

「ありがとうございました」
スバル達は、お金を払って近くのベンチで、ミソラは美味しそうに食べ、スバルは呆然としていた

やく10分後

「ごちそうさま」
ミソラは、あの馬鹿デカイパフェを10分で食べ終えていた

「ゲプツ」
一方、スバルは半分ぐらいしか減っていなかった

「スバル君大丈夫？」
ミソラは、色んな意味でヤバそうなスバルを見ていった

「ミソラちゃん、残り食べてもらってもいいかな？」
スバルは、もうギブアップでミソラに救助を求めた

「全然いいよ」
ミソラはスバルから、パフェを受け取りバクバク食べていたその時
ミソラは……
「（これって、スバル君と間接キス!?!）」

ミソラは凄くニコニコしながら、スピードを上げて食べた

約、1分30秒ぐらいで食べ終えた

「ふう、ごちそうさま」

ミソラはとても、上機嫌でエベレストDXパフェを食べ終えた

その時、スバルは……

「(やっぱり、ミソラちゃんの胃はブラックホール?)」

ミソラ最強（前書き）

はい

サブタイトル意味深（笑）

すみません

最近バイトが忙しくて全然更新出来ませんでした

ちなみに、今はバイトの昼休み中

こんな、つまらない小説ですが、どうか見捨てないで下さい

今日の夜もう1話更新したいと思います

ミソラ最強

「スバル君、お腹いっぱいになったことだし、遊ぼうよ」
ミソラは腹が少し出ちゃっている、スバルの手を握った

「ちよつ、ミソラちゃんお腹苦しいよ」
スバルは、ゲップをしてミソラに伝えた

「そんなの、動いていればよくなるよ」
ミソラは、スバルの手を握って歩き出した

「（ロック助けて）」
スバルは、心の中でウォーロックに助けを求めたでも、返事はやはりかえってこなかった

ーTKKタワーー

「さあ、スバル君行くよ」
ミソラは必死にスバルの手を引っ張っていた

「ミソラちゃん、僕もう動けないよ」
スバルは、ベンチに座ってしまい一切、動かないでいた

「スバル君は、私のこと嫌いなの？」
ミソラは、スバルの手を引っ張る力を弱めて少し涙目（演技）にな
って言った

「嫌いな訳ないよ」

スバルは、ミソラの嘘泣きに負けて立ち上がって逆にスバルがミソラの手を引っ張り、TKタワーに行けるエレベーターに乗った

その時スバルは

「（やっぱり、ミソラちゃんを泣かせる訳にはいかない）」

一方ミソラの方は

「（やっぱりスバル君は、私の嘘泣きとかには、弱いなあ（クスクス）」

てなように、笑っていたことは、ミソラとこれを読んだ人しか知らない

ミニラ最強（後書き）

それでは、バイトに戻ります

ノイズ（前書き）

本日2話目

サブタイトルは何となくです

ノイズ

TKタワー

「スバル君はやく行こう」

ミソラは、相変わらずハイテンションであった

「ミソラちゃん、少し待ってね、何々今回は、ノイズの不思議？」
スバルは、看板に書かれているものを見て？マークを浮かべた

「ノイズかあ、早く見てみよ」

ミソラは、少し興味が出て来て歩き出した

「スバル君、クリームゾンがあるよ」

ミソラは、ショーケースに飾ってあるクリームゾンを指指しながら言った

「でも、なんでこんな所にクリームゾンが？」

スバルは、また更に？マークを浮かべた

「まあまあ、細かいことは気にしないの」

ミソラは、笑顔でスバルにそうつけて、また次の場所へと歩き始めた

「今度のは、なんでクリームゾンドラゴンと僕のバトルシーンの写真があるの？」

なんとそこには、レッドジョーカーになったスバルとクリムゾン
ラゴンのバトルの時の写真であった

「説明文が、書いてあるよ、何々、人工衛星が偶然撮った写真です。
だって」

ミソラは、説明文を読み上げて後ろにいるスバルの方を振り向いた

「人工衛星かあ、まあ仕方ないかあ」

スバルは、あつと言う間に諦めた

ドーン！！

「なんだ、今の爆発音は？」

スバルは、慌てて辺りを見回したそこには、なんと

「星河スバルか」

ジョーカーがいた

「なんで、ジョーカーがここに！？」

「簡単な話だ、そこにあるクリムゾンを捕りに来たまでだ！」

ジョーカーは、クリムゾンの方に手を向けるとクリムゾンがジョー
カーの手の中に入っていた

「なにを企んでいるのか解らないけどお前を放っておけない」

スバルは、そう言ってウィザードOFFのボタンを押してウォーロ

ツクをハンターに戻した

「スバル君、私も戦う」

ミソラも、スバル同様にハーブをハンターに戻した

『チツ！ジョーカーかよ、厄介だな』

ロツクは、ハンターの中でそう言った

『ポロロン、私達はジョーカーと戦うのは初めてね』

「でも、行くよハーブ」

「ええ」

ミソラがそう言うのとハーブは、やる気に満ちた顔付きになった

「トランスコード004ハーブノート」

ミソラは、ハーブノートに変身した

「ウォーロツク僕達も」

『ああ！』

「トランスコード シューティングスターロツクマン」

スバルは、ロツクマンへと変身した

「ファイナライズ グレイブジョーカー」

ジョーカーも戦闘スタイルへと変身した

「……ウェーブバトル ライド・オン」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0175i/>

流星のロックマン絆を守る者

2010年10月9日00時35分発行